

2024 年度

学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

2024年度 梅光学院中学校・高等学校 学校評価書 校長(樋口 紀子)

1 学校教育目標

* 学校目標

Beyond the Borders 「自分を超える・国境を越える」

* 生徒目標

学び・経験・奉仕

- ・「学び」:授業、学校行事、課外授業、課外活動、留学、ボランティアなどあらゆる機会を用いて生徒は学びます。
- ・「経験」:体験したことを言語化して、他者に伝え、他者からフィードバックを得ることによって「経験」へと昇華する。
- ・「奉仕」:学んだ知識、技術、能力を他者のために用いる。

2018年度に掲げた教育目標を継続して定め、これに従って教育を行っていく。

2 現状分析

- ・学び:ICTを活用することによって主体的な学びをスライドや動画で発表することができるようになった。生徒のICT活用術は年々向上しており、目を見張るものがある。特に、マッケンジー杯では、中1～高ⅡまでSDGsについてICTを活用しながら英語で発表をすることが定着してきたことも評価すべきことである。
- ・経験:「Wake-Up全員留学」プログラムを開始して7年目。今年度からやっと「新型コロナウイルス感染症」以前の状態に戻った感がある。中学生は昨年同様オーストラリアに2週間、高校生はフィリピンのマニラにある大学の姉妹校、エンデランカレッジに3週間実施することができた。マニラでは週末、スラム街でのボランティア活動も実施でき、生徒にとって貴重な体験となった。昨年度は多数の高校生が体調を崩したが、今年は特に問題なく、留学を終えることができたこともよかった点である。また、ニュージーランド中長期留学についても希望者が多く、7名(3ヶ月1名、6ヶ月6名)の生徒を送ることができた。加えて、高大連携の一環として実施している高2の「課題探究」はそれぞれの研究テーマに即して、大学の先生に師事することによって良い学びの機会となっている。この課題探求は、進路選択に対しても有効な学びの形態となっている。
- ・奉仕:「サービス・ラーニング」が定着し、幼稚園、保育園、児童養護施設、子ども食堂、海岸清掃等に生徒たちが出向き、社会問題を目の当たりするよい経験となっている。また、今年度からJRC(青少年赤十字)を開始し、献血推進活動を行った。これは全国的な組織で、他の高校でも部活動としてあるので、今後は高校生同士の横の関係も構築できるものと期待している。また、大学で始まった「海外ボランティア実習」を2023年度から中高生にも広げ、共同開催しているが、中高生の方が参加人数が多いという結果になっている。去年も今年もカンボジアで支援地に行っているのも、これを今後も継続していくことが必要である。

3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

- ・学び:英語のプレゼンテーションコンテスト、「マッケンジー杯」でSDGsに関連する英語のスピーチを中高生が実施したことは素晴らしかった。特に、中学生の英語力が伸びたことは注目に値する。ここで提案されたことを各自が日常の生活に活かしていくことが今後の課題である。
- ・経験:「Wake-Up全員留学」やニュージーランド中長期留学は順調に実施できている。他の留学や研修等が実施できなかったが、春には大阪の教会で、夏には韓国の教会で大学と合同のリトリートを開催できたのは生徒たちのよい霊的な経験となったと思う。
- ・奉仕:「サービス・ラーニング」は3年目を迎え、授業として定着してきたので、今後どのように広げていくことができるかが課題である。

4 学校評価総括(取組の成果と課題)

・学び:

①ICT教育-生徒がiPadを用いて学びをすることは日常生活の中で当たり前となっているが、生徒の自主的な学びのために、さらに運用方法について検討が必要である。

②進路指導-中1～高3まで定期的に進路検討会が実施され、早い段階から生徒の希望が組織的に把握できている。ただ、卒業後早い段階で退学をしたりする場合があるので、卒業後の生徒の進路状況も把握する必要があると感じている。また、帰国生、国際生等のケアも組織的にできてきているが、日本語力の向上が必要な生徒い対してどのように支援してくかが課題である。

・経験:

①Wake-Up全員留学-実施に関しては「新型コロナウイルス感染症」の前の時期に戻っているが、円安、物価高騰等の問題があり、費用が当初よりも高くなっていることが課題である。

②各種留学-ニュージーランド留学は実施できたが他の留学はできなかった。費用が高くなっていること、最低催行人数を確保することができない等の問題があるが、生徒の海外での経験を増やすために留学や研修の種類をコロナ前に戻すだけでなく、もっと増やしていくことが課題である。

③高大連携事業-高Ⅱの「課題探究」は主体的な学びとして有効であると思われるが、高校生へのアドバイスをしてくれる大学が以前に比べ少なくなっていると感じている。大切なプログラムの一つであるので、今後も継続していきたいと思うが、連携する大学を確保することが課題である。

・奉仕:

①ボランティア活動-「サービスマーケティング」をより充実させる必要がある。

②サマリア・デー-月々のサマリアデー献金活動やサマリア・カジュアルデー活動は通常通り実施できたので、来年度もこの活動がより活発になるように実施していく

5 次年度への改善策

・学び:ICTの活用に関しては、高等教育での学びを視野に入れ、iPadの活用の中に、キーボードの活用を加えていきたいと思う。また、ICTの研修会に教員だけではなく生徒を加えたことがICTの活用の充実につながったので、来年度も生徒も交えての研修会を実施したいと思っている。加えて、chat GPTの活用についてつも前向きに検討したい。

・経験:「Wake-Up全員留学」を実施するだけでなく、コロナ前に実施していた留学や研修の復活、及び新しい海外への留学・研修等を開発、実施することできればと思う。

・奉仕:「サービスマーケティング」の拡大と、支援地を訪れる「海外ボランティア実習」の参加人数の増加と訪問国の複数化に取り組みたい。

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（学年）

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
中学校	①	生活と学習の場としてのコミュニティを作る（支え合う学級、学年、中学となる）	○生徒会（委員会）活動を通して生徒主体の学校を作る。 ○「全員担任制」によって学校全体で生徒一人ひとりをケアする。 欠席者への対応は、事務室とも連携する。 ○「全員担任制」によって一人ひとりの生徒の情報を全校で把握する。	A 支え合う学級、学年、中学校が達成している B 概ね達成しているが一部達成できていない C 多くの場面で達成できていない	○新入生交流会など、中学校独自の企画をたて、実行することができた。研修旅行も、今年度は、生徒企画で1泊2日の充実したものとなった ○昨年に引き続き、行事準備の時期は担任を固定するなど、よりきめ細やかな指導、サポートができた ○担任会や、BLEND、Teamsを使って情報共有をし、問題が起こった場合、迅速に方針を定め、対応できる教員が同じ質で丁寧に対応できる体制を整えることができた。不登校生徒に対するケアも、スクールカウンセラーや養護教諭と協力して、完全登校には至らぬまでも、スムーズに行えている	B	現在の中学校2年生は問題を抱えている生徒が多く、また、コミュニケーション不足によるトラブルも多い。一朝一夕には解決しない問題もあり、引き続き丁寧に、粘り強く対応していく。 問題を起こす生徒の方に視線が向きがちであるが、日々を大いに楽しんでいる生徒が多いのもまた事実であり、彼らがより充実した学校生活を送るための支援も、より充実させていく必要がある。	只木 徹
	②	学習習慣の確立	○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける。また、カレンダー機能を活用して、勉強のスケジュールを把握しやすくする。 ○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる。 ○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す。	A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する C 多くの生徒が達成できていない	○見通しをたてて、スケジュール管理ができていない生徒と、できていない生徒間での成績差が明らかになってきている ○学習意欲にかなりの差が見られるのが現状である。 ○WakeUp全員留学を経験することで、「自分の知らない世界をもっと見てみたい」という意欲を持つ生徒が増えている。また、中高一貫の強みを生かして、中学生でも参加できる留学やボランティアプログラムも多く提供できている	B	提出物の状態がひどい生徒に関しては保護者にも報告し、家庭と一緒に習慣づけをするべく動いているが、改善にまで至っていない。 中高一貫の本校においては、公立中学校に比べて「受験」というハードルが低いことが利点ではあるが、その分、進路、キャリア教育を充実させ、「今の勉強」を「将来の自分」へつなげるイメージを持たせる必要がある	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（学年）

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
高 等 学 校	①	自立した学習習慣の確立	○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける ○放課後の対策講座への積極的な受講を促す ○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる ○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す	A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する C 多くの生徒が達成できていない	○単元別テストに向けての学習には取り組めているが、それが日頃の学習習慣に結びついているかは個人差がまだある。 ○少人数ではあるが、進路実現に向け生徒自ら放課後の時間を利用し、講義を受ける姿が見られつつある。 ○高校担任団の中での情報共有ができていて一方、学習意欲への動機付けは不十分な部分もある。 ○日頃の学校行事や授業から探究的な学びを取り入れ、意欲向上に取り組むことはできた。	B	単元テストに合わせた学習習慣を日頃の学習習慣に発展させることができるよう、単元別テストの結果を踏まえ、個々の生徒の課題に合わせた学習指導のサポート体制を検討する。 今年度同様キャリア教育や進路指導を充実させ、学習の目的意識を高める。生徒同士の学び合いや教え合いを促進する学習環境を整える。	重 村 雄 太
	②	自己の進路について考え、進路目標に基づいて学校生活を設計する	○進路を考えるプログラムを行う ○校外での積極的な体験活動を促す ○高大連携プログラムを進路指導に結びつける	A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している C 多くの生徒が達成できていない	○課題探究や進路イベントを通じて自身の希望進路を考える機会を設けることができた。 ○地域の子ども食堂へのボランティア等に参加する生徒が大幅に増加した。 ○高大連携を通じて希望進路先を明確にし、志望理由書作成に活用する生徒が増加した。	B	学校内に留まらず、学校外のプログラムへの参加を通じて、地域社会との連携を強化し、ボランティア活動や体験活動の機会を増やす。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
国語	①	確かな国語力を養い、思考力・表現力を高める	○多様な文章構造の文章を読み、内容を正確に把握し、批判的に読み解く。 ○論理的な思考力を養い、それを文章や口頭で的確に表現する。 ○インターネット上の情報を活用し、信頼できる情報を見分ける力を養う。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○内容を正確に捉えることはできているものの、著者の意見に対する自身の考察が十分ではなかった。 ○著者・自身の意見を口頭で論理的に説明する力は身についたが、文章で表現する力は引き続き取り組む必要がある。 ○各生徒が閲覧するサイトを十分検討しながら取り組む姿勢が見られた。	B	作品を通じ各生徒が自身の意見を表現することに注力してきたが、まだ普遍的な・論理性を逸脱している意見もあり、意見の構築の仕方を含め引き続き教科として取り組む必要がある。 一方、参考資料としてインターネットを使用する際の注意点を多くの生徒が実践できしており、こちらに関しては十分満足できるものであった。	川口駿純
	②	豊かな人間性を育み、共感力と発信力を高める	○文章を通じ異文化理解や社会問題に関する学習するとともに、多様な視点から物事を捉える力を養う。 ○スピーチ、ディベート、作文など、様々な表現活動を通して、思考力と表現力を高める。 ○発表などを通じICTスキルを高め、適切な情報リテラシーを身につける。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○作品を通じて現代社会の特徴・問題を読み取り、そこから探究的な学びにつなげるなど各生徒の関心に基づく学びを実践することができた。 ○単元別テストではペーパー試験の形式にとらわれることなく、多様な方法で自身の意見を発表する機会をもつことができた。 ○プレゼンテーションや動画作成を通じてICTスキルを高めることができ、かつインターネットの使用方法についても問題なく活用することができた。	A	学年によっては差があるものの、多くの学年・科目において、作品を踏まえ、探究的な学びにつなげることができた。 その学びを発表する機会も設けることができ、引き続き教科内で成果を検討しながら、来年度以降の教育活動に反映させていく。 また、生徒にとっても身近なツールである生成AIを、添削ツールとしての活用にも取り組むなど、適切なICT活用を実践することができた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
社会	①	基礎学力を育み、学習意欲を高める	○単元別テスト等を通じて生徒の理解度を把握しながら、学習意欲を高めるように授業を工夫する。 ○適切な量のホームワークを課し、家庭学習の姿勢を育む。 ○多彩な資料を準備しＩＣＴをフル活用して、教科への興味関心を呼び起こす。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	○単元別テストや小テストを用いて、生徒の学習状況を把握し、授業改善に努めた。 ○おもに中学生に向けて、適宜課題を課した。自学の習慣をより身につけることができれば、更なる成長が期待される。 ○全科目において、ICTを活用し、生徒の能動的な授業参加を促した。	B	定期的に教科会を実施し、各教科・科目の授業の状況や取り組みを共有した。しかし、建学の精神に基づく教科の目標を達成するための評価、という点では更なる改善が必要である。 ICTなどを活用し、教科科目への興味関心を持ってもらえるよう努めたが、基礎学力の定着については課題が見られる。	広木
	②	過去や現代の社会問題に関して理解・関心を深め、自分の考えをアウトプットする	○各単元に関連する社会問題を提示する。 ○生徒の社会問題についての疑問や関心事項を、単元内の学習内容に結びつける。 ○生徒がアウトプットをする機会を増やす。 ○発表前後の意見交換を通じて、より相手に伝わりやすい表現を模索できるよう支援する。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	○各単元に関連する社会問題を提示するよう努めた。 ○探究科目では、生徒の社会問題についての疑問や関心事項を学習内容に結びつけることができた。 ○生徒のアウトプットの機会を多く持つことができた。 ○発表をする際には、生徒同士が意見交換を通じて、よりよい表現を模索できるよう促した。	A	現代社会における問題と生徒が学習している内容はどのように関連しているかについて留意した授業づくりをおこなった。 生徒自身が、社会問題への理解と解決策の模索ができるよう促し、生徒間で共有する活動を通して、表現力向上もはかった。	光

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
数 学	①	分かりやすい授業の展開	○生徒の理解度に合わせて基礎から応用へと段階的に進むカリキュラムを設計する。 ○抽象的な数学の概念を身近な例や具体的な事象に結びつけ、図やモデルを使って視覚的に説明することで、直感的な理解を促す。 ○タブレットや電子黒板を使い、グラフや図形の動的な変化を可視化することで、生徒の理解を助ける。	A…80％以上の生徒が授業を肯定的に評価している。 B…60％以上の生徒が授業を肯定的に評価している。 C…50％以上の生徒が授業を肯定的に評価している。	○単元別テストを生徒の状況に合わせて細かく設定して、取り組みやすい環境にした。 ○タブレットを授業中の説明だけでなく、質問・提出物確認のため、積極的に活用した。オンライン授業のときも丁寧な対応ができた。 ○生徒間で話し合いをさせたり、生徒の解答をお互い見ることができるようにして、解答方法や各自の意見を共有した。	A	○未提出者には週担当・個人担当の教員が丁寧に声掛けを行い、提出物の内容確認を徹底することで、達成に向けたサポートを実施した。 ○成績下位者への指導については、放課後の時間をより有効に活用できるよう、さらなる工夫の余地があると感じた。 ○教科書の内容理解に重点を置いた結果、基礎力を強化することができたが、演習部分の充実にも取り組んでいきたい。次年度はこのバランスを改善していく予定である。	崎 山
	②	基礎力・応用力の育成	○基本的な公式や解法を定着させるため、小テストや再テストを取り入れ、定期的な復習を促進する。 ○基礎的な知識を活用した応用問題や、実生活に関連した問題を扱い、解決に向けた思考力を養う。 ○生徒が自ら課題を発見し、答えを導き出す探究的な学習を取り入れる。例として、統計や図形をテーマにしたプロジェクト型学習を行う。	A…80％以上の生徒が目標を達成できている B…60％以上の生徒が目標を達成できている C…50％以上の生徒が目標を達成できている	○未提出者にはこまめに声掛けを行い、提出物の内容も丁寧に確認することで、生徒一人ひとりをサポートした。 ○再チャレンジに向けて質問の時間を確保し、生徒がより確実に理解できるよう支援を行った。 ○演習の時間では、過去問を含むテキストを活用し、丁寧に指導・解説を行った。一部の単元で演習時間が不足する場面もあったが、次年度はバランスを工夫し、さらに充実した学習環境を目指したい。	B	○未提出者に対しては、週担当および個人担当の教員を通じて積極的に声掛けを行い、提出物の内容確認を徹底した。必要なサポートを提供することで、生徒一人ひとりの達成を促した。 ○放課後の時間の確保が難しい中でも、成績下位者への指導に工夫を重ねた。今後さらに効果的な支援方法を見つけ、指導力の向上を目指していきたい。 ○教科書の理解を優先したことで、基礎力の定着に取り組むことができた。次年度は演習にも十分な時間を割き、より充実した学習環境を提供していきたい。	章

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
理科	①	自然の物事・現象を論理的に説明できるようになる	○基礎学力の向上と、主体的な学びができるようになるために、予習と復習を習慣付けられる課題を配布する。 ○生徒自らが疑問を持ち、実験により、解き明かしていく過程を学び、実験手法やその結果をもとに、自然の事物や現象を質的・量的な関係や時間的・空間的な関係から説明できるように授業を工夫する。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○一部教科では宿題等は極力減らし、毎回5分間程度の小テストを行うことで、主体的な学習を促した。ほとんどの生徒は回を重ねるごとに良い点を取ることができるようになった。しかし、年度の後半になるにしたがって点数の上昇度合は小さくなっていった。 ○授業内の実験や観察および探究的な活動および発表の割合を増やした。発表後のフィードバックによって論理的説明について考えられるよう指導した。その結果、フィードバックで指摘されいような発表を意識してつくるようになった。	A	○小テストに関しては、年度の後半にかけてモチベーションが低下したと思われる。毎回の小テストで、テストに特別感がなくなり、慣れてしまったものと思われる。次年度は少しずつ変化を加える必要があると考えられる。 ○1回きりの実験でなく、継続的に行う探究活動では、発表を改善する機会が与えられるので、よりよい改善がみられたと思われる。	山崎 廉知
	②	自然の事物・現象を科学的に探究するための資質・能力を身につける	○授業における観察・実験の割合を増やし、現象を実際に確かめながら理解するように指導する。 ○生徒に「探究の方法」を習得させるために、自然の現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する「探究」のプロセスを授業へ積極的に盛り込む。 ○観察や実験から得られた結果を比較したり、関連付けたりできるよう、授業をデザインする。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○生徒が身近な事象に疑問点を見出し、仮説を立て、実験を行う姿勢を身につける授業を意識して行った。しかし、講義型の授業で行った知識が、実験や探究活動になると発揮されないことが散見された。 ○実験や探究活動の結果について発表する活動を増やした。文字や写真のみの発表から数値を産出し、表やグラフにして伝えることの重要性を強調して指導した。発表を重ねるにしたがって、表やグラフを用いた発表が増えた。しかしながら、その表やグラフの活用方法はまだ完璧とは言えず、指導されたのでとりあえず導入したといったグループが多々見受けられた。次年度以降導入すべきグラフの種類やなぜそれらを利用するのかを生徒自身が理解して選択できるようにしていく。	B	○講義型の授業で得た知識はそのまま実験や探究活動において使えるようにはならず、実際に使えるようになるためには、さらなる指導が必要であると考えられる。 ○表やグラフを用いた説明の伝えやすさやわかりやすさを理解していったと思われる。一貫した方針で継続して指導する必要があると考えらえる。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
保健 体育	①	積極的に運動に親しむ資質 や能力の育成	○個人の授業記録により、自 身の成長や能力を客観視さ せ、達成感や満足感に繋げ る。 ○グループワークを通して、主 体的・対話的な深い学びを身 に付ける。 ○iPad等のICT機器を活用した 協働的な学習を促す。	A 80％以上の生徒が目標を達成で きている。 B 60％以上の生徒が目標を達成で きている。 C 50％以上の生徒が目標を達成で きているとは言えない。	○各種目でipadを用いて自身の動作の確認 や記録を行い、課題発見や問題解決に役立 てることができた。 ○グループワークを通して自身の問題点を生 徒同士で客観的に指摘し合えるなど、意見 交換も活発に行われ、技術の向上において も効果的であった。 ○見本となる動作はデジタル教科書ですぐに 確認をするなど、タイムレスに調べる習慣が 身についた。	A	○iPadで自身の動作を撮影し数値を記録す ることで成長が実感でき、更なる学習意欲 の向上に繋がった。 ○グループワークでは自身の映像や記録を客 観視できるだけではなく、クラスメイトの 記録向上に向けた改善策の提案や健康状態 の気づきなど、深い学びに繋がった。 ○教科を横断した学びや、スポーツの動作 や知識の日常生活での応用など更なる深い 学びを実践していきたい。	森 田
	②	生涯を通じて周囲の人々と 継続的に運動ができる資質 や能力を育てる。	○グループ活動の主體的・対 話的な活動の中で集団で体を 動かすことの楽しさを学ぶ。 ○ICT機器を活用したチームの 動作確認や戦術分析を通して、 周囲の人々と各種目の特性を 楽しむ能力を身につける。 ○授業中の大会運営はもちろん、 クラスマッチ、スポーツ 大会、他学年との合同授業の 企画・運営に関わる中で、実 践するだけではない、スポー ツの楽しさを学ぶ。	A 80％以上の生徒が目標を達成で きている。 B 60％以上の生徒が目標を達成で きている。 C 50％以上の生徒が目標を達成で きているとは言えない。	○iPadやプロジェクターを活用して、生徒同 士で活発な意見交換が行われるなど、技術 の向上だけではなく、コミュニケーション の一つの手段としてICT機器は効果的であっ た。 ○各種目ごとに適切な運動強度やルールを 設定することで、生徒の意欲的な活動を引 き出すことができた。 ○他学年との合同授業やスポーツ大会で は、学年性別が様々な中で、実行委員を中 心に、思いやりを持って全員が安全で楽し める大会を実施することができた。	A	○運動が苦手な生徒でもICT機器を活用する ことで技術の向上や対話的な活動を活性化 することができた。 ○運動強度やルールを工夫することで、種 目の特性を楽しむ能力が身についた。 ○昨年課題であった学年横断型の授業を実 施することができ、他学年との交流の中 で、性別や体格差があるなかでも楽しめる よう、一人一人に思いやりや工夫が見られ た。	裕 介

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
音楽	①	音楽の知識・技能や思考力・表現力を向上させる。	○音楽科においては、定期演奏会や日々の授業の課題、受験などを通して、自分の限界に挑戦できる環境とサポート体制をつくる。 ○音楽理論や音楽史の知識を増やし、実技や鑑賞に役立てられるようにする。 ○普通科においては、歌唱やトーンチャイム等の器楽、作曲など幅広い演奏・創作活動を行う。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	○定期演奏会や卒業演奏会では、それぞれが高いレベルの曲に挑戦し、演奏技能を飛躍的に向上させることができた。演奏会の評価もよく、さらに人前に立って演奏する機会を増やしたいという意欲に繋げることもできた。 ○演奏技能だけでなく、理論や歴史、聴衆に音楽をどのように紹介するかなどを学び、演奏の表現力を深めるとともに、聴衆目線に立ったコンサートを企画する力を養うことができた。 ○普通科でもアンサンブル活動を充実させ、他者と協力して音楽を作り上げていく過程を学び、アンサンブルの楽しさを実感させることができた。	A	○来年度の演奏会も、昨年を踏襲しながら新しいプログラムにも挑戦し、生徒の音楽力を高めるとともに、聴衆もコンサートを鑑賞して音楽について学び、楽しめるようにしていく。 ○普通科のアンサンブルは、自分たちの演奏を客観的に捉えながらより高い完成度を目指していけるように、グループ活動を指導したい。また、発表する機会が普通科は少ないので、練習の成果を見せられる場を増やし、生徒の意欲向上に繋げたい。	寺西穂香
	②	様々な音楽作品、音楽文化に触れ、音楽を愛好する心情を育てる。	○クラシック、日本伝統音楽、ポピュラー音楽、諸民族の音楽など、多くのジャンルの音楽を授業で取り扱い、それぞれの魅力や価値について考え、共有する活動を行う。 ○教師主導の説明ではなく、生徒が興味のある音楽について調べ、発表し合う機会を増やす。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	○普通科では、日本の民謡や伝統音楽、諸民族の音楽、ポピュラー音楽について取り扱った。グループでその音楽の特徴や成り立ちなどを調べて発表し、その良さや価値を考える活動を通して、様々な音楽文化に対する興味関心を高めることができた。 ○音楽科では、クラシックを中心としながらも、授業や演奏会ではミュージカルや日本伝統音楽にも触れ、音楽家として幅広い知見が得ることにつながった。	B	○日本伝統音楽や諸民族の音楽は、調べ学習と自分なりにその良さを考える活動が主だったので、今後は様々な音楽文化の特徴を比較したり、歴史や宗教、地理など他教科の視点も踏まえながら、より深くそれぞれの音楽文化の魅力を考えられる活動をしたい。 ○グループ活動が苦手な生徒もいるので、それぞれが役割を持ち、自分の意見を発信しつつ協力して課題に取り組めるよう、活動の仕組みを作ってサポートしていきたい。 ○授業内の発表のみならず、掲示物などを制作させ他クラスや他学年の生徒の目にも触れるようにすることで、様々な音楽文化に対する興味関心を継続的に育てられるようにする。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
美術	①	○美術の創造活動の喜びを味わう。（中学）	○各学年の作品制作を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。	各学年の作品が期限内に完成した作品が、 A：9割以上の提出 B：7割以上の提出 C：7割未満の提出となる。	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。また、欠席の多い生徒については、担任団と連絡を取り合って取り組ませようとした。	B	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。不登校気味の生徒の作品製作については、工夫が必要であると感じた。	俣野 凌摩
	②	○美術を通じて自己表現の楽しさを実感する。（中学校）	○各学年でテーマを設け、自分の考えや感情を表現する活動を取り入れる。	自己評価等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てることが A：目標以上の成果を上げた。 B：目標に見合う成果を上げた。 C：目標に見合う成果に及ばなかった。	生徒たちは積極的に自分の考えを作品に反映しようとした。特に鑑賞活動を通じて、他者の作品から学び取る姿勢が見られた。一方で、自分の表現に自信を持ってない生徒への支援が今後の課題となる。	A	多くの生徒が自己表現を意識した作品制作に取り組めたが、自分の考えを形にすることに苦手意識を持つ生徒もいた。作品の発表の機会を増やすことで、自己表現に対する自信を育むことが今後の課題である。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
英語	①	4技能5領域のスキル向上 (これに加え高3においては模擬試験の成績向上に努める)	○教科書外の活動として、授業内外で以下のことを行う。 ・多読 ・多聴(English Central) ・語彙(Quizlet) ・発話・会話を記録する ・Key sentences(中学) ・プレゼンテーション(主に高校) ○模擬試験における英語の成績向上を目指した学習を行う(高3)	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	コミュ英語と英表の授業の分担の違いから、コミュ英ではすべての活動に取り組み、英表では主にプレゼンテーションやライティングの活動を行った。本年度から多読教材は紙媒体へ変更し、中学はネイティブの音読をモジュール活動として取り入れた。また中1から高1までのActive ReadingReading教材Oxford Reading Treeの導入により多読を楽しんで取り組むことができたと思う。Quizletは定期的に取り組むことができ、特に英語学習へのモチベーションの高い生徒が自主学習の一環として取り入れることができた。2学期末から3学期の1か月間Weblioオンライン教材のトライアルは生徒教員にとっても合理的で効果的な教材であったと思う。本年度と教材費は変わらず使用できるなら来年度取り入れたい。	B	主にコミュ英で取り組むべき活動が目標として挙がっており、英表における目標が明確ではないため、来年度はどちらの授業でも取り組めるような活動指針を決める必要がある。また、各授業の目標の軸・向上させるべき能力をより明確化し、役割を分けることでより集中的で効率の良い授業展開をしていく必要がある。 さらに、模試だけでなく、外部の英語に関する資格取得やスピーチコンテスト参加なども積極的に取り組んでいきたい。	佐折
	②	ICTを活用することによる英語学習への意欲向上・日常的に英語に触れる機会の確保	○Quizletを活用し語彙学習を行う ○Weblio英会話を通じて日本語が母語でない英語話者と英語で会話する楽しさを知る ○紙媒体の多読教材を積極的に取り入れ長文の持久力をそだて読解力をつける ○上記のものに加え、その他のICTソフト、プログラムなども用いて、より効率的・効果的な英語学習ができるよう努める	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	ほとんどの授業において、単元別テストや単語テスト以外の活動では、ICTを活用することができた。パワーポイント使用による授業の効率化、Quizlet、Socrative、ロイロノートをはじめ、目標にあがっているような様々なソフト・アプリを使うことができた。WeblioによるAI教材はトライアル期間中、生徒達はアプリを使って効果的に学習に取り組むことができた。	A	昨年から使用しているロイロノート、Socrative、Quizlet、nearpodなど授業内での主熟度確認や課題提出などほとんどの生徒が使いこなせている。一か月トライアルで使用したWeblioオンライン教材は生徒の自主学習の効果を期待できると思った。	美奈

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析
技術・家庭	①	ICTを活用した授業展開	○ICTを活用し、興味関心を引き出す授業工夫。 ○基礎的知識・技術の定着 ○ICT機器を活用した教材の工夫	A：80％以上の生徒が目標を達成できている。 B：60％以上の生徒が目標を達成できている。 C：50％以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	○動画を視聴し疑似体験をさせたり、kahootでゲーム形式で取り扱い表示を覚えたり、ICTを活用し興味関心を引き出しながら、家庭科の基礎知識を身に付けることができた。 ○新たにgoodnoteを使い、観察日記をリアルタイムで見ることができるよう工夫した。	A	○2時間連続で授業を行うことが多いため、集中力の低下が課題であったが、効果的にICTを使うことで、積極的な授業参加が見受けられた。
	②	実践的な授業の充実	○実習を通じて危機管理能力やコミュニケーション能力を身につけさせる ○ゴミ分別機の製作	A：80％以上の生徒が目標を達成できている。 B：60％以上の生徒が目標を達成できている。 C：50％以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	○体験授業をすることで、ものづくりの楽しさを味わうことができた。 ○各学年で実習を5回以上行い、調理や裁縫のスキルを身に付け、生きる力を養うことができた。 ○自動ゴミ分別機の製作を通して実際の生活に生かされているか、実習を通して学ぶことができた。	A	○中学1年、高校1年では賛美歌カバーを作成し、学校生活で使用する教材を大切にすることと裁縫技術を学習した。 ○中学2年、高校1年の調理実習においては、アジの3枚おろしを行い、食材への感謝と、調理技術の向上につなげることができた。 ○自動ゴミ分別機の製作を通して、ものづくりの専門的な仕組みを知ることができた。

崎
山
章

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教	①	福音を聞くこと、知ること、信じること。神と自分と他者と、神の造られた被造物(自然や動物)を愛し仕える生き方(キリスト教精神、普遍的価値である人権や平等や博愛)を身に着けること。	歴史にわたって人々を励ましてきた旧約聖書・新約聖書テキストから、キリスト教の英知を学ぶ。現代の諸問題を取り扱い、いかに考え、いかに生きるか、アクティブラーニングを通して、生徒同士が学び合う。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	1学期に「建学の精神」を、梅光学院の成り立ちにおいて、各自、「個人と歴史」の2本を調べて発表した。2学期には普段あまり触れることのない「旧約聖書」全体を取り扱った。また3学期には、各自の1年間分のフィールドワークをまとめて、発表した。生徒の手元には3つの大きな作品が出来上がっている。毎学期、6学年をシャッフルして、グループに分け、先輩・後輩が助け合ながら、学びに取り組み、互いの発表を聴き、グループ全体としての作品も作成した。	A	生徒の作品は、グループ内発表、教室内発表、全体発表とあるが、この素晴らしさをここだけに留めておくのは惜しく、価値があるので、保護者や地域に届くにはどうしたら良いか考えたい。	後藤 献一
	②	聖書、キリスト教文化を理解し経験すること。	学内外のキリスト教行事、地元の教会の礼拝に出席し、信仰生活を中高生のうちに体験する。そのフィールドレポートを提出する。継続して参加するよう勧める。 礼拝において主体的に参加し、奉仕をする。ボランティア活動を経験する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	リアルな教会を経験してもらうため、各自、地元の教会に、各学期2～4回行くことを奨め、レポートを提出している。また月に一回程度、金曜日の夕方に行われるBCC(Baiko Community Chapel)や、バイブルキャンプ、支援チャイルドに、今年も多くの中高生が参加することが出来た。毎週火曜日にクラス礼拝も行われ、生徒が司会から聖書を通したメッセージまで、輪番で行うことが出来た。ボランティアに行った生徒は、授業で発表をし、分かち合うことが出来た。	A	ほとんどの生徒が達成することが、このミッションスクールに来ることにより、聖書の学び、キリスト教文化体験が出来ている。ボランティアによく行く生徒と行かない生徒と2極化しているので、全員が1年に一度は参加するカルチャーを作りたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ド ラ マ	①	自分の資質を発見し、それをより豊かに広げる	○ドラマエデュケーションの基本的なエクササイズを通じて自分の資質と向き合う。 ○毎回の「ふりかえりシート」で自分の中の感情の動きを言語化する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○コロナ禍でのコミュニケーション体験不足が徐々に改善された印象があり、ドラマの授業を初体験する中学校1年生や、高校1年生の外進生の活動もスムーズに進めることができた ○昨年から引き続き「他の人の誰かの気持ちになって」文章を書くと言う作業を取り入れ、生徒たちもそれを楽しみ、更に意欲的に取り組むことができるようになってきた。身体表現が苦手な生徒も積極性をみせるようになった。	A	授業内で様々な魅力的な表現が生まれるが、これを他の先生に共有し、他教科でも生かしてもらえるような手段を工夫することが今後の目標である	大 塚 恵 美 子
	②	自分と違う「他者」を意識し、コミュニケーション、プレゼンテーション力を向上させる	○「コミュニケーション」「リーダーシップとフォローワーシップ」をキーワードにして、クラスの特性に沿ったプログラムを組む。 ○「短い作品創作とクラス内発表」を繰り返すことで、自分と違う「他者」と協力して一つの物事を成す経験を積む。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○授業内では、まずは「話し合う」事を第一とし、文字でのやり取りは情報の共有、記録にとどめる事を徹底して指導した事により、グループワークで黙ってiPadを見ているという光景がぐっと減った ○今年は「演劇祭」を実施。各クラスが25分の作品発表に挑戦した。製作過程では、お互いの参加意識の差で摩擦が生じる場面もあったが、最終的に作品を仕上げ、観客の拍手をもらう経験をし、達成感を得る事ができた	A	「演劇祭」では、多くの生徒が他教科の授業では見せない顔を見せた。演劇祭後のクラス内発表の質もぐんとあがっている。ただ、ドラマの授業で求めているのは、「上手にやる」ことではなく「たくさんの発見を積みあげる」事であることを忘れず伝えていく必要がある。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
教務部	①	授業の実質化（授業時数の確保）	○行事の精選 ○授業回数の確保	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○年間行事予定作成時に教科・分掌・生徒会との連携を密にすることで、計画通りの行事運営を目指した。 ○行事の精選には課題が見られ、更なる検討の余地を残している。	B	○行事担当者と教務部とで、行事内容の詳細を早めに共有しておくことと更により。 ○職員会議等で、建学の精神や学校目標を踏まえた行事の精選を行うことができることよい。	只木 徹
	②	学校行事や時間割などを適切に計画し、また、教材備品等の環境を整える。	○授業に支障のないように、時間変更や教材の発注を行う。 ○時間割編成時、完成時に必修科目を確認する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○授業変更等は各教科の協力を得ることができ、問題なく変更を処理できた。教材の発注も適宜行った。 ○時間割作成後必修科目のチェックを行うことができた。	A	授業変更や行事変更は多くあったが、教科主任と連携を図り、授業に支障の無いよう努めた。 授業備品等、学習環境の充実を目指した。	
	③	学籍・成績管理に関する事務処理を迅速に行う。	○生徒の異動が起きた際、転入試験の準備、退学関係書類の作成など、迅速に事務処理を行う。 ○校務システムBLENDにて、日々の出欠席を週担任と教務部でダブルチェックする仕組みを確立する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	転入試験に適切に対応して処理できた。 退学や転出事務も適切に迅速に行えた。 出席簿や成績管理についても、部内でチェック体制を整え、実行することができた。	A	○週1回分掌会を設け、学籍・成績管理に係る業務を円滑に進めることができた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
生徒支援部	①	自主的に学校生活を送るよう支援する	○円滑な生徒会・委員会活動のために助言・サポートを行う。 ○円滑な生徒会・委員会活動のために教員間で情報を共有する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○生徒から様々なアイデアが出る様になったが、「見通しをたてて」「効率的に遂行する」「情報を共有する」部分にまだ弱さが残る ○生徒支援部でのサポート体制は丁寧に行うことができた	B	「対面・口頭」でのコミュニケーションが必要な場面、「文字」で共有した方が良い場面など、適切な情報の共有手段を選ぶ経験値が少ない。時に失敗する経験もさせながらサポートしていくことが必要。	只木 徹
	②	発達障害等に関して全教職員で情報を素早く共有し健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○TeamsやBLENDも活用しつつ、生徒一人一人の顔を思い浮かべながら、彼らの抱える問題を理解できている ○生徒が抱えている問題を共有する作業はスムーズに行われている ○すべての非常勤講師に情報が伝わっていないケースも存在する	A	個別の支援計画書を作成している生徒以外にも発達に問題を抱えているように思われる生徒が増えている現実を踏まえ、スクールカウンセラーや養護教諭と協力した支援体制のより一層の強化が今後の目標である。	
	③	問題行動に関して全校で情報を素早く共有して生徒の健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教員で情報共有のための会合を行う。 ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する。 ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○問題を共有する作業はスムーズに行われている ○情報を共有することによって、1人の先生の負担にならないような、チームでの問題解決ができている ○すべての非常勤講師に情報が伝わっていないケースも存在する	A	昨年同様、担任団が上手く機能し、生徒支援部として動くことが少なくなってきた。引き続き、この機能の強化をはかっていきたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
進路指導部	①	高III生徒の希望進路実現を支援する。	○高III生徒が進路志望を固め、希望進路に進めるように支援する。 ○支援方法は、高III生対象の進路相談、課外授業、個別指導、小論文指導、面接・プレゼン指導等による。 ○FINE SYSTEM、Compass、K-Navi等の効果的な活用を検討し、生徒保護者に適切な情報を提供する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○総合型・学校推薦型選抜による入試をうまく活用し、多くの生徒が年内に合格することが出来た。 ○各支援を効果的に行うことができ、希望進路を実現することが出来た。 ○保護者総会、二者・三者面談等で情報提供を行ってきた。ただ、生徒個人の可能性をさらに引き出すため、近隣の大学のみにとらわれるのではなく、学問や研究内容からさらに上のレベルを目指した進路選択ができるように情報提供をしていく必要性を感じている。	B	第一志望に掲げていた希望進路をかなえた生徒が多くを占めたことは大変喜ばしいことである。これも探究等で将来や学びたい学問から逆算し、希望進路を実現させる取り組みの成果といえる。しかしながら、いわゆる「安全牌」を選択し、満足してしまっているという一面がある。	重村雄太
	②	生徒の進路実現のために進路検討会、進路希望調査、ガイダンス等を定期的に実施し、全教員で生徒を支援する体制づくりをする。	○進路検討会を各学年学期に実施する ○進路検討会の結果に基づき、担任団は教科担当に注力すべき生徒やクラスの現状を伝え、成績向上のための指導を実施してもらう。 ○中学から高校までの6年間の進路指導計画を探究を中心に考案する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○進路検討会を全体で十分に行うことはできなかったが、各担任団・教科のレベルで情報共有することはできた。 ○各教科で情報共有し、非常勤講師とも連携を取ることが出来、個別指導等実施することが出来た。 ○前年度の反省を活かし、計画を進めることはできた。中学部の探究もゼミ形式で実施し、生徒が自らの将来について探究する良い機会となった。	B	中学担任会、高校担任会を定期的に確実に実施できる仕組みができあがったことにより、生徒の進路情報の共有が活発に行われるようになった。課題は非常勤講師や管理職への情報が不十分なことであり、十分な共有方法の仕組み化が急務である。	
	③	大学等連携やキャリア教育推進により、生徒の進路意識と学力向上のための環境整備を行う。	○生徒が主体的に進むべき進路について深く考えられるための進路ガイダンス、講演会等を実施し、生徒の進路意識向上を実現する。 ○年間の進路ガイダンス、講演会、研修会、自習室、進路資料室の整備をする。 ○進路関係の環境を整備し、学校全体が勉強をする雰囲気になるよう協力する。 ○個別指導を実施し、学力向上に効果的な指導を行う。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○進路ガイダンス、講演会などを滞りなく実施することが出来た。 ○各研修会を滞りなく実施することが出来た。 ○掲示物、自習室等環境を整備することはできたが、学びに向かう姿勢を醸成しきれていない ○滞りなく個別指導を実施することが出来た。	B	大学連携がさらに希望進路に関連させ、入学試験などに活用できるよう早期からの取り組みや、内容の高度化に取り組む必要がある。担任団は業務過多の中、生徒たちの個別指導の中で論文執筆活動によりそい、それぞれ生徒がやりがいを持てるレベルまで指導することが出来た。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ミ ッ シ ヨ ン 部	①	ミッションスクールに導かれたことにより、福音を聞き、神の言葉を聞く機会を得る	○毎日の朝の礼拝に出席する ○ミッション委員(生徒)の充実 ○保護者へのアプローチ ○聖書研究会	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	毎朝、確実に学院礼拝が行われ、内外の講師が来て、聖書からメッセージを解き明かして下さった。ほとんどの生徒がこの学校に入って、初めて聖書に触れるが、礼拝と聖書の授業と共に、理解を深めている。以前は毎日、礼拝の賛美歌を変えていたが、生徒が覚えるために、今週の賛美として歌い、週に一度変更をしている。保護者へのライブ配信も毎日行われ、生徒と同じ恵みが届けられている。毎週(火)のクラス礼拝は、教室で行い、生徒が司会やメッセージを担う。 今年から宗教委員会を、大学と合わせて、ミッション委員会という名称に変更した。生徒たちが、よりミッションスクールを担う思いを込めている。行事や礼拝を担うことが出来た。	A	保護者へのアプローチを、ライブ配信以外で増やしたいと願っている。 聖書研究会(バイブルスタディ)を増やしていきたい。	後 藤 献 一
	②	キリスト教やミッションスクールの豊かな文化、行事、伝統を体験する	○入学礼拝、卒業礼拝 ○始業礼拝、終業礼拝 ○イースター ○ツリー点灯式 ○クリスマス礼拝 ○特別チャペル(春季・秋季修養会) ○BCC(月一度の梅光コミュニティチャペル)	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	昨年、初めて中高大と合同でクリスマス礼拝をしたが、今年は市民クリスマス礼拝として、外部にも公開し、満員のホールとなった。クリスマスキャストにも大勢の生徒が参加し、聖劇やハンドベル&合唱、献金当番を担った。 夏には韓国サマーバイブルキャンプが行われ、ソウルのジョイアスチャーチと合同で行った。2月にはカンボジアボランティア研修が行われ、支援チャイルドに会った。BCCにも中高生が多く参加した。	A	梅光学院では、中高大と合同で、多くの素晴らしいキリスト教集会が行われている。対外的にもより広報し、梅光でたくさんの恵みに与り、地域に開かれた学校でありたい。	
	③	キリスト教精神・隣人愛を実践する	○サマリアカジュアルデー募金を通して、里親スポンサーを啓蒙し、貧困にある子どもたちや地域を支援する ○施設を訪問し、愛を表す ○ボランティア活動をする	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	収獲感謝礼拝において、野菜・果物・缶詰を集め、4カ所の施設に持って行き、喜ばれた。 中高からたくさんのクリスマス献金があった。特に学校祭の売り上げを献げた。学院全体を合わせて7カ所に献金を送った。 今年7月、JRC(青少年赤十字)に加盟し、献血などたくさんのボランティアの機会を得た。子ども食堂や多様なボランティア活動に、中高から延べ200人の生徒が参加した	A	活発なボランティア活動があったが、よく参加する生徒と全く参加しない生徒と差があったので、全校生徒が、1年に1度は参加するように動機づけていきたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
創造教育 改革部	①	教員による探究的授業の実践と教員スキルの全校的向上を推進する （目的；生徒が主体的かつ積極的に授業へ参加できる学びを全校的に広めるため、探究的授業の実践と教員研修を一体化させ、授業改善を継続的に進める。）	○各教員（常勤以上）が探究的授業をシラバスに盛り込み（年最低3回）、実践状況を記録・共有する。 ○創造教育改革部が主導し、探究的授業の実践例やノウハウを共有する研修を年3回開催する。 ○研修後のフォローアップや授業観察を実施し、教員間で成功事例を共有することで、教員スキルの向上を図る。	A: 探究的授業を80%以上の教員が年3回以上実施。 B: 探究的授業を60%以上の教員が年3回以上実施。 C: B未満。 授業アンケートや研修後アンケートで教員の満足度やスキル向上感を測定。	年度当初に、教諭・常勤講師は年3回以上の探究的な授業を実施することと、シラバスに計画を反映し、概ね実施することができた。また、毎週の教員研修にて、創造教育改革部の教員が、自身の授業実践報告や教員を対象とした模擬授業などで、他教科の授業内容の確認ができ、授業改善に活かすことができた。	A	教諭・常勤講師は探究的な授業の実施にも慣れ、日常的に探究的な授業展開を行えている教員も多くなる。 次年度からは非常勤講師も探究的な授業を推進していく必要があるが、教育方針の浸透や、授業スタイルの変更などの課題が多い。	重村雄太
	②	学校の教育方針に沿った教育課程の検討と改善を進め、提案する （目的；本校の教育方針や特色を教育課程に反映させることで、生徒・保護者から信頼される魅力的な学校づくりを目指す。）	○教育方針に基づいた教育課程検討会を年3回開催し、横断的な観点で教育課程の改善案を作成する。 ○生徒・保護者からの意見をアンケートを通じて収集し、検討会で反映させる。	A: 教育課程案が作成され、試行・分析が適切に実施された。 B: 教育課程案は作成されたが、一部試行・分析が遅延した。 C: 教育課程案の作成や試行が十分に進まなかった。 アンケートで教育課程改善への満足度や効果を評価。	管理職作成の教育課程のたたき台を元に、教育方針や求める生徒像に基づいて、本校の特色を活かした教育課程を提案することができた。ただし、試行・分析の面において、未実施のため評価できない。	B	高等学校は教育課程を大きく変更したが、新たに実施する学校設定科目も多い。最大限の教育効果を得るために校内で完結する内容だけでなく、地域社会と連携を進める取り組みが一層必要となる。	
	③	学校全体で必要な新たな業務を拾い上げ、分掌化を進める （目的；現在の学校教育で宙に浮いている業務を明確化し、生徒たちのために必要な業務を体系化して推進することで、よりよい教育環境を整備する。）	○教職員を対象とした調査を実施し、現場で宙に浮いている業務や必要とされる新しい業務を洗い出す。 ○洗い出された業務を創造教育改革部で一旦取り扱い、優先順位や具体的推進方法を検討する会議を年3回開催する。 ○必要性の高い業務について、実施体制を構築し、校内での分掌化や業務改善を進める。	A: 洗い出された業務の80%以上を具体化し、推進・分掌化の計画を作成できた。 B: 洗い出された業務の60%以上を具体化し、一部推進に着手できた。 C: B未満。 教職員へのアンケートを実施し、新業務の進捗状況と効果を評価。	図書館業務、教員研修、探究学習などの業務を集約し、次年度実際に業務を進めていくことで検討が進められている。ただ、これらの業務を進めていくことで、見えてくる課題や、意見を収集できていない教員や職員もいるので着手できた部分は限定的と言える。	B	今年度より新たに立ち上げた分掌であるが、授業改善と教員の授業実践共有という点では一定の効果があった。その一方で、明確に業務が定められた分掌ではないので、常に分掌としてできることを考えながら、仕事・業務を言語化し、教職員が納得感を持って遂行していくことが次年度の課題である。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2024年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
入試広報部	①	オープンスクール参加者数の増加 （目的：学校の魅力を体験してもらう機会を拡大し、志願者・入学者数の増加につなげる。）	○オープンスクール告知用の広報物（チラシ・SNS投稿・DM）のデザインと配布強化。 ○参加者に魅力的なプログラム（体験授業、通学時費用説明、個別相談）を提供する。 ○適切な時期に学校訪問を確実に行う	A:前年度比で参加者数を20%以上増加させる。 B:参加者の満足度アンケート（80%以上が「満足」と回答）。 C:参加者数のデータを地域別・学年別に集計して分析する。	今年度、オープンスクールの参加者数は前年比120%と増加した。SNSやチラシなどの告知強化が奏功し、特に中学校訪問を通じた広報活動が効果を発揮した。 参加者アンケートでは、90%が「満足」と回答し、プログラム内容に対する高評価を得た一方、個別相談ブースの待ち時間に関する課題も明らかになった。 次年度は待ち時間を短縮する仕組みを導入し、よりスムーズな運営を目指す。	A	オープンスクールの参加者数や志願者数の増加が達成できた主な要因として、学校訪問を適切なタイミングで実施し、中学校や塾との連携を確実に深めたことで、本校の認知度が効果的に広がった点が挙げられる。一方で、中学校ごとに志願者数に顕著な偏りが見られることが課題として浮上している。特に、志願者が急増した特定の学校については、その要因を詳細に分析し、成功事例として他校への広報活動に應用することが次年度の重点施策といえる。	重村雄太
	②	入試説明会の質向上と参加者増加 （目的: 入試説明会を通じて、志願者・保護者、教員、塾に学校の魅力や入試制度を効果的に伝える。）	○昨年度アンケート結果を参考に、説明会プログラムの内容の改善をする。 ○進路相談や費用に関する詳細の説明ができる体制を整える ○中学校や塾の訪問で説明会の案内を積極的に行い、参加登録を増やす。	A:説明会の参加者数を前年比で15%以上増加させる。 B:アンケート結果で満足度80%以上を達成する。 C:保護者からの個別相談申込数を前年比で10%以上増加させる。	入試説明会プログラムに在校生や卒業生のスピーチを新たに導入したことで参加者の満足度が向上し、アンケートでは90%が「満足」と回答した。また、梅光祭時には進路相談ブースを設置し、具体的な不安解消の場を提供できた。中学校や塾訪問の頻度増加が、参加登録の拡大に寄与した。	A	梅光中高について一定のイメージを持たれている一方で、中学校や塾からは「具体的にどのような活動が行われているのかが伝わりにくい」という指摘を受けていた。そのため、説明会において進学実績や教育内容、必要費用などの詳細な情報を包み隠さず開示したことで、本校の現状を正確に伝えられたという手応えを得ている。 また、梅光祭の進路相談ブースなど、生徒の意見を取り入れた広報活動が来校者から高い評価を得ており、今後も生徒や保護者の声を積極的に取り入れながら進めていくことが重要であると考ええる。	
	③	広報活動の強化（SNS・広告・パンフレット） （目的：学校の認知度を広げ、魅力を多面的に発信することで志願者の関心を引く。）	○SNS（Instagram、Twitterなど）の定期投稿（すべての行事ごと）と広告配信の活用。 ○募集要項・学校案内パンフレットを魅力的なデザインに刷新する。 ○地域紙やWeb広告への出稿を強化し、ターゲット層へのリーチを拡大する。	A:SNSフォロワー数を前年比30%以上増加させる。 B:広告の効果測定（クリック数や資料請求数）を行い、前年比20%以上の効果を確認。 C:資料請求数の集計を行い、前年比15%以上の増加を目標とする。	今年度、インスタフォロワー数は前年200から532と増加し、広報活動の効果が顕著に表れた。特にInstagramでの投稿や広告キャンペーンが多くの反響を生み、ホームページアクセス数も120%増加した。 パンフレットの刷新も好評で、進路指導担当者や塾関係者からの評価が高かった。 募集要項については、志願者増による問い合わせが増加したので、次年度はQ&Aを充実させる必要がある。	A	本年度はSNSを効果的に活用した一年となった。InstagramやFacebookでの投稿や広告を通じて本校の露出を増やし、ホームページやオープンスクール申込ページへの誘導を成功させた。また、AERAや「みんなの学校情報」への投稿や無料記事の公開など、WEB上での露出強化が一定の成果を上げている。 一方で、現状展開している広告やチラシの内容にはさらなる改善の余地があり、今後は重点的に実施する広告や打ち出す内容を精査し、より効果的な広報戦略を構築する必要がある。	